

第2章 流域の分節と連関

1. はじめに

四万十川流域は広域にわたるため、自ずと上・中・下流域がそれぞれに自然、歴史、生活・生業上のまとまりを持つ。しかしながら同時に、川によって貫かれる流域全体は、相互に関係をもちながら存在している。本章では、四万十川流域を複数のまとまりに分ける要因と、それらを相互に関係づける要因とを、別個にではなく、同時に理解していくを試みる。

四万十川流域全体を見通す上で取り上げるべき要素として、ここでは自然環境、農業及び漁業、流通・往来、文化を取り上げたい。四万十川流域の文化的景観を構成するこれらの要素については、あるいは流域全体を対象に、あるいは地域ないし自治体単位で、詳しく調査研究が進められてきている。本章では、これら既往の研究を参照した上で、これらを流域全体の地理的な関係の下に置き直す。個別の諸要素を流域の文脈に置き直すことで、まず、流域の分節と連関の要因が顕在化してくることだろう。

ただ、同時にこれら諸要素を相互に関連づけ、横断的にとらえていくことも不可欠である。いわば専門領域を横断することになるこうした見方は困難をともしものであり、これまで積極的に取り組まれてきたとは言い難いが、文化的景観の観点からすると、諸要素の横断的把握は、その本質に迫るための重要な観点といえる。

第1章に述べた通り、四万十川流域の地形・地質や水系は、自然条件の根底をなすものであり、流域の人間生活と社会構造を規定してきた。まずは、その概要を記しておく必要があるだろう。その上で、農業、漁業、流通・往来、文化の各面につき、自然条件との関係、あるいは各要素間の関係を念頭におきつつ、読み込んでいこう。

2. 自然環境の概要

自然環境は、地形や地質などのフィジオトープ（無機的要素）と植生や動物などのバイオトープ（生物学的要素）から成る。本節では、フィジオトープを参考文献14、17を、バイオトープについては参考文献10、19を基本とし、流域旧市町村の市史・町史・村史も踏まえ、流域の文脈に置き直して執筆した。

（1）四万十川流域のフィジオトープ

A 地質

地質学上では、四国は中央構造線によって、北側の西南日本内帯と南側の西南日本外帯に区分される。構造線は北から中央構造線、御荷鉾構造線及び仏像構造線の3大地質構造線があり、地質は、北から順に領家帯、三波川変成帯、秩父帯及び四万十帯の4地帯に大別される。この4地帯は非常に異なった地層、岩類から成り、相互の間で分布する地層が少なく、各地帯が独立した地質的特性を有している。

四万十川流域の地質は、その大部分を四万十帯が占めているが、上流域の一部は秩父帯に属している。

秩父帯の岩石は、主に古生層（石灰紀～ペルム紀）よりなるが、所々に黒瀬川亜帯の諸岩類や断層にはさまれた中生層が分布している。特に黒瀬川亜帯には、先古生代の寺野変成岩類や三滝火成岩類が露出している。地質時代からみれば、前述の古生層は約2億年前から3億年前の地層であり、また寺野変成岩類や三滝火成岩類は、約6億年以上の先古生代の岩石である。

四万十帯は、主に中生代白亜紀（6,500万年前より1億3,600万年前の間）の地層よりなるが、四万十市中心部より海岸沿いの地域には古第三紀（6,500万年前～2,500万年前）の地層が分布している。また支流の中筋川流域や中村平野付近には、第四紀更新世（180～160万年前から1万年前）の地層が小面積を占めて分布している。

上流域 上流域は秩父帯が占める。

四万十川流域に分布する秩父帯は、フィリピン海プレートの沈み込みに伴って海底堆積物やサンゴ礁が隆起した古い付加体（海洋プレートが沈み込む際に海洋底に堆積していたチャートや碎屑物が剥ぎ取られ、陸側のプレートに張り付いた堆積物の集合体）で、中・古生代の様々な成因や年代の異なる地層と岩体が混在する複雑な地質構造である。秩父帯は付加されるときに強い圧力を受けて破碎されたものが多く、豪雨の際に大規模な崩壊現象を起す傾向があり、また秩父帯と四万十帯との間に仏像構造線と呼ばれる断層が走るため、地すべりが集中するエリアである。

秩父帯のやや南寄りに、西南西－東北東方向の構造線に挟まれて、愛媛県西予市の三滝山周辺を典型とする黒瀬川亜帯の諸地質（白木谷層・伊野層・白亜層・三滝火成岩類）が分布している。黒瀬川亜帯の南側は、仁淀川断層をはさみ三宝山亜帯である。三宝山亜帯に含まれる斗賀野層と三宝山層は密接な関係を持っており、この一帯でみられる石灰岩やチャートなどは、ジュラ紀から白亜紀にかけての海流に流れ込んだ岩塊であると考えられている。

愛媛県との県境に沿った標高 1000 ～ 1400m の四国山地山頂部には石灰岩が断続的に分布し、カッレンフェルトやドリーネが見られる。ここを四国カルストと呼ぶが、この石灰岩は海底火山の上に形成された造礁サンゴで、古生代の二畳紀のものである。この四国カルストの南斜面には黒瀬川構造体がレンズ状に分布しているため、断層に沿って蛇紋岩がみられる。そのため、梶原町永野のように蛇紋岩に関連した地すべり地形もみられる。

梶原町の坊主山－烏帽子山山地の南斜面には急崖が形成されているが、これを境に南側一帯は地質も地形も大きく変化する。この南北の境を古くから仏像構造線と呼び、仏像構造線以南を四万十帯と呼ぶ。

中流域 四万十川中流域以南は四万十帯が占め、中生代白亜紀に属する堂ヶ奈路層から野々川層にいたる様々な地層が広く分布している。それぞれの地層は東西方向に分布し、さらに北から南に向かって

順に新しい年代で並んでいる。特に四万十町窪川地域ではその様子が明瞭に見られ、各地層年代に地溝付近の大陸斜面上に堆積した物質から成り立つ。

この一体を占める四万十帯はジュラ紀後期の前弧海盆の移動に伴い生まれ、ジュラ紀後期から白亜紀の地層帯である。秩父帯と同様に古い付加体で、チャートや火山岩類をブロックとして含むメラングェ、砂岩および砂岩泥岩互層からなる。フィリピン海プレートにより最も新しく生成された地質であるため地すべりが少ない。

下流域 四万十川下流域も四万十帯の地層が大部分を占めている。安並・蔵岡・佐田の地域は中村層、佐岡から中村を経て有岡に至る地帯は有岡層、八束の西部から支流・中筋川の南部山地は須崎層である。

洪積世の地層は、中筋川や後川の沿岸の台地にあって中筋層と名付けられており、平野や双海の海岸段丘堆積物も洪積世の地層となっている。沖積層は四万十川・後川・中筋川の沿岸に発達し、中村平野を形成している。

また中筋川一帯は北と南を断層が走るため南北に延びる。宿毛湾から入野に至る地溝帯で、傾斜は極めて少なく、この地溝帯の低地部を中筋川が蛇行し

表2-1 四万十川流域の代表的な地質

地質区		地層名・地質系統	主な分布地
秩父帯	黒瀬川亜帯	白木谷層 伊野層 白亜層 三滝火成岩類	梶原町、津野町
	三宝山亜帯	高岡層 斗賀野層 三宝山層	梶原町、津野町
四万十帯	新莊川亜帯	堂ヶ奈路層 新土居層 半山層 須崎層	梶原町、津野町、 中土佐町、四万十町、四万十市
	大正亜帯	下津井層 野々川層 中村層 有岡層	梶原町、津野町中 土佐町、四万十町、四万十市

ながら流れる。

B 地形

四万十川流域は仏像構造線により秩父帯に属する部分と四万十帯に属する部分に二分され、それを境に地形も大きく異なる。破碎帯である秩父帯では地すべり跡の緩傾斜地が連続して見られるが、四万十帯は新しい地質帯であるため緩傾斜地や平地が極端に少ない。

また四万十川流域の位置する外帯（中央構造線の南側）の河川は、一般に流域面積は小さいが、山間部で著しく蛇行しているため流路が比較的長いこと、河口が直接深い海に流入しているため下流部の平野の発達が貧弱であること、という2つの特徴を有している。四万十川流域も、その外帯河川特有の地形的特徴を有しており、度重なる造山運動によって形成された山地部分が大部分を占め、平野は地溝帯である中筋川流域にわずかにみられるのみである。流域面積2,270km²のうち、地形別面積の内訳は、山間部91.5%、平地部6.4%、水路部2.1%で、山地

が卓越した地であることがわかる。

上流域 津野町から椿原町にかけての上流域一帯は秩父帯に属するため、比較的傾斜の緩い斜面と川沿いの谷底平野が連続する地形となっている。

山地は北側に標高1000～1400mの四国山地が連なり、西側には雨包山（1,111m）や高研山（1,058m）、南側には鶴松森（1,100m）と、中起伏の山地が広く分布する。谷は複雑に入るが起伏量が少ないため山姿も全体的に穏やかである。

緩傾斜であるのは稜線部も同様で、800～1000m級の峠が複数見られる。

中流域 中土佐町大野見地域から四万十町窪川地域を中心に開けた盆地は高南台地（窪川盆地）と呼ばれ、幡東山地とその延長である火打ヶ森・五在所ノ峯山地にかこまれた陥没地域である。隆起した付加体が土佐湾に沿ってこれらの山地を形成し、行く手を阻まれた四万十川の堆積作用により高南台地が形作られた。全体的には、小起伏丘陵とその間を埋める谷底平野よりできている。

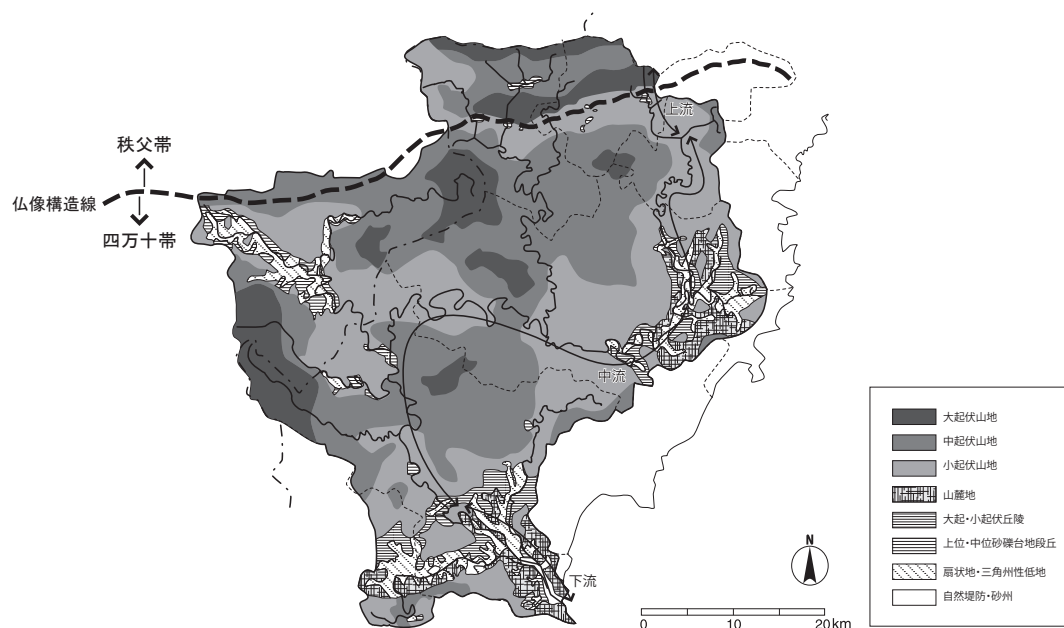


図2-1 四万十川流域の地形・地質分類

高南台地以西から四万十市西土佐地域にかけて分布する北幡山地は小起伏地域で、第三紀の地盤運動によって流域一帯に生じた隆起が河川の下方浸食を復活させ、この地域に顕著な穿入蛇行地形を生み出している。

二次支川である広見川が流れる愛媛県側は、四万十帯の含まれる外帯山地に属し、大・中起伏山地により、肱川との流域界を形成している。そのうちの鬼北盆地西半部の三間盆地は、西落ちの逆傾斜運動をうけて河川の最上流部に局所的な浸食基準面の一時的安定がおこり、面状浸食や面的な堆積作用が働いたとみられる盆地である。鬼北盆地東部の近永・松丸地方は、段丘地形や氾濫性の微地形が多く、広見川は県境あたりから典型的な穿入蛇行を示す。

下流域 四万十市中村地域周辺や中筋川沿いの標高の低い地域は、かつて海水が侵入していた地域であり、周辺は小起伏山地となっている。低地はその丘陵の開析された部分に細長く形成された谷底平野である。その中でも中筋川、後川下流域などは、四万十川本流の形成した自然堤防のため、内水の排水が不良で、しばしば冠水被害をうけてきた氾濫原性低地である。この非常に平坦な地形のため、河口域の河川は広大な汽水域となっている。

(2) 四万十川流域のバイオトープ

A 山林の植生

四万十川流域ではスギ・ヒノキを中心とした人工林が山間部から低地までほぼ全域に分布しているが、川沿いには、シイ・カシに代表される二次林が分布しているところが多い。また、黒尊川や目黒川上流域には暖温帯の自然植生域がある。

上流域 四万十川源流の不入山(1,336m)では山頂近くにブナ林が分布し、ブナクラス域(落葉広葉樹林域)の自然植生が見られる。山頂付近のブナースズタケ群落は、高木層にブナをはじめ、ツガ、ヒメシャラなどが林冠をつくり、下層は背丈以上もあるスズタケに覆われている。また1,200m以下の斜

面にはブナ・コカンスゲ群落もある。ブナ林の下層植生にササ類が生じるのは、日本のブナ林の特徴であるが、こうした原植生の面影をとどめた極相林(原生林)は最近少なくなっている。

山地の大部分は植林地として利用されてきたため、スギやヒノキの林域となっているが、本来の自然植生はヤブツバキクラス域(常緑広葉樹林域)である。また、二次林としては、山腹斜面にシイ・カシ萌芽林やコナラ群落、アカマツ群落がモザイク状に点在している。河川に沿った急峻な谷壁斜面などでは、ツクバネガシ、アラカシ、ハイノキなどの常緑樹やアカシデ、クマシデ、イロハモミジ、ホオノキ、ネムノキなどの落葉樹を交えた森林が見られる。アカマツ林は、かつては、四万十川流域の低山地帯に最も普通に見られた二次林であるが、マツクイムシの被害とその後の造林によって急速に面積を狭めている。

最上流部には四国カルストがあるが、この植生はきわめて特異である。カルストの内、牧草地は姫鶴平南斜面上部、地芳峠東側南斜面に、ササ草原は五段城南斜面、姫鶴平下方から地芳峠、地芳峠から牛城、源氏ヶ駄馬付近に分布している。五段城南斜面および姫鶴平南斜面にはササ草原の下方にイヌシデアカシデ群落が分布し、源氏ヶ駄馬南斜面の一部にはブナースズタケ群落も見られるなど、カルスト台地における草地の特徴を保っている。

中流域 中流部においてもスギ・ヒノキ植林の占める割合は非常に高い。集落から離れた奥山もほとんどはスギ・ヒノキ植林となっているが、四万十川沿いではシイ・カシ萌芽林の二次林も見られる。

自然植生としては、堂が森風景林や一ノ又溪谷風景林等の山林で見ることができる。不動山の一角に残る一ノ又溪谷風景林の一部はモミ、ツガ、ヒノキ、カシなどの巨樹が茂る自然林で、植生分類上ではウラジロガシ・サカキ群集に属する。また湿度が高く、保水力にもすぐれ、下層群落もよく発達し、豊かな林相を保つ。

下流域 下流部の中村平野では低山地のほとんどがシイ・カシ萌芽林となる。また尾根部にはシイ・カシ萌芽林やスギ・ヒノキ植林が点在している。

B 河川区域の植生

河川敷 河口に近づくにつれて河川敷は広くなり、それにとまって発達した河辺植生がみられるようになる。河辺植生を構成している主な植物群落は、ヨシ群落、オギ群落、チガヤ群落、ヨシノヤナギ・アカメヤナギ群落、クズ群落、メダケ群落、マダケ群落、エノキ群落、ススキ群落等である。これらのうち、下流域の河川敷を構成する植生は、ヨシ、オギ、チガヤ、セイタカアワダチソウ、ツルヨシ、ヨシノヤナギ、アカメヤナギなどを優先種とする群落によってその60～70%が占められている。

海藻・海草類 四万十川の広大な汽水域には、四万十川の特産となっているアオノリ（アオノリ属）の他に、河口から2～3km上流の間には20～30cmの糸状になる褐藻のカヤモノリや、糸状分枝でやはり20～30cmになる紅藻のオゴノリ、ツノムカデなどが冬から春の季節に良く繁茂している。潮間帯には、イワノリ（アマノリ属）やヒトエグサがみられる。

この内、アオノリとヒトエグサは四万十川河口域の重要な水産物である。アオノリは天然に生育したものを採取し、天日干しして出荷する。ヒトエグサは汽水域に網を張って養殖し、瓶詰の海苔の佃煮として加工される。

また河口域の砂泥域には、海産顕花植物のコアマモやウミヒルモが大きな群落を形成しており、アマモ場と呼ばれ、河口域に生息する魚類の保育場の役割を果たしている。四万十川では、コアマモは河口から数km上流までの砂泥域にみられ、繁茂は場所により差があるが、濃密な群落は幾分塩分が高く、潮の干満で海水・淡水が混合するような静穏なところほど広く形成される。アマモ場は瀬戸内海や広い内湾に広域的に見られ、最繁茂期は3月から5月頃の春期で、その後成熟し、夏の間は枯れるが、

四万十川の河口域ではほぼ周年繁茂がみられるのが特徴である。四万十川の間崎地区の砂泥域は、数ヘクタールほどのアマモ場になっており、タイ、キチヌ、ヘダイ、アカメなどの稚魚のすみかにもなっている。四万十川の河口域は、非常に魚類相が豊かであることが知られているが、これらの稚魚の多くはアマモ場の中に見られ、水産資源の培養の場として重要な働きを果たしている。

C 魚類

四万十川では185種の魚類の生息が確認されており、魚種数や水生生物数は全国で最も多い（表2-2）。河川環境の変化によりアユやテナガエビの漁獲量の減少や、カジカなど絶滅したといわれる種もあるが、その一方でアカメやクロホシマンジュダイのように他の河川ではあまり見られない魚もいる。

上流域／アマゴ域 上流域は本・支流の最上流部にあたり、河床には岩盤が露出し、大小さまざまな岩石礫が転がる。水の流れは速く、急流と落ち込み、淵が連続する冷水域である。夏季水温は普通16～22℃であるが、昭和51（1976）年8月には最高23.6℃を記録している。魚の代表種はアマゴ（地方名、アメノウオ）で、カワムツ（アカハエ）、ウグイ（イダ）、タカハヤ（モツゴ）、アカザ（オコゼ）などが多い、ウナギとドンコも生息する。四万十川水系の典型的アマゴ域は、四万川川、梶原川の親が淵から上流、北川川の大部分、松葉川の中土佐町大野見地域大股分岐から上流、それに目黒川や黒尊川など支流の上流域である。

中流域／オイカワ域 中流域は河川の屈曲部から次の屈曲部までに早瀬（流速が早く、白波の立っている瀬）・淵・平瀬（早瀬より流速が遅く、白波の立っていない瀬）が1単位となって1組のみ組み込まれている。夏季水温は23～28℃で、渇水期には30℃に達することがある。魚の餌となるラン藻やケイ藻がよく繁茂している。代表種はオイカワ（シラハエ、ショウハチ）で、アユ、ウグイ、ドンコ（ゴウソ）、ヨシノボリ（ゴリ）、ボウズハゼなどが多く生息する。

四万十川のオイカワ域は中土佐町大野見地域の大股分岐から下流、梶原川では四万川川合流点・新田から下流で、四万十市西土佐地域の岩間付近まで続く。もちろん、この間のすべてが中流型の様相を示すとは限らず、四万十町大正の四万十川でみられるように、急流が連続する上流型河川相が見られる場所もある。

下流域／コイ域 下流域は長い淵と淵の間に平瀬が介在している。中流域で見られるような白波が立ち、岩石礫が目立つ早瀬はここではみられないが、この区間の最下流端にはアユの産卵場となる瀬が発達する。夏季水温は27～30℃、代表種はコイで、ウグイ、オイカワ、カワムツ、オオキンブナ、ギンブナ、ゲンゴロウブナなどのコイ科魚類、ヌマチチブ（チチコ）、ヨシノボリ、ゴクラクハゼ（ゴリ）、ウキゴリ（ゴリ）、ビリンゴ（ゴリ）、ボウズハゼなどのハゼ科魚類が卓越する。ウナギも多く、ボラやスズキ、キチヌ（ヒレアカ）などの汽水魚が遡上して混生しているのが特徴的である。四万十川のコイ域は、四万十市西土佐岩間から四万十市岩崎の淡水域下流端までである。四万十市中村地域の佐田、小

畠、岩崎にはアユの産卵場となる瀬が発達している。

汽水域 汽水域は海水の影響を受ける区間で、流れの緩やかな深みが続き、潮汐の影響を受けて水面の高さに変動がある。河床は砂泥で、場所により礫と砂利が混じる。夏季水温は27～31℃。代表種はアカメ（ミノウオ）で、アカエイ（アカエ）、アカヤガラ、シログチ（シラブ、イシモチ）、コショウダイ（コタイ）、ヘダイ（ヒョウダイ）などの海水魚、コノシロ（メナガ）、ドロクイ（コノシロ）、サヨリ、クロダイ（チヌ）、メナダ（スクチ）など典型的な汽水魚に、コイ・フナ類、ウグイなどコイ域の魚が混生している。四万十川の汽水域は河口から四万十市岩崎（または不破）までの約10kmの区域である。

海水魚の遡上 四万十川は、純粋の海水魚が河口から約80km上流の中流域まで遡上する独特の河川である。確認された遡上としては、四万十町大正地域のボラ、四万十町十和地域のスズキやシマイサキ、四万十市西土佐地域のキチヌやギンガメアジなどがある。海水魚の遡上の理由として、①河口が閉塞していないこと、②河川と海の水温差が小さいこと、③勾配が緩やかで水量も多く遡上を妨げる障害が少

表2-2 四万十川の代表的な魚類

最上流域	アマゴ（アメノウオ）
河口から最上流域	アユ、ウグイ（イダ）、ウナギ、サツキマス
下流から中・上流	アカザ（オコゼ）、オアイカワ（シラハエ、ショウハチ）、オオキンブナ、カワヨシノボリ（ゴリ）、ギンブナ、コイ、ドジョウ、ドンコ、ナマズ、ニジマス、ヌマチチブ
河口から中流	ブルーギル、ウキゴリ、ビリンゴ、ミミズハゼ、ボウズハゼ、カジカ、カマキリ（アユカケ）、キチヌ（ヒレアカ、ホンチヌ）、ギンガメアジ（ナガエバ）、カワアナゴ（アナゴ）、ヌマチチブゴ、クラクハゼ（ゴリ）、ヨシノボリ（ゴリ）、ボラ、スズキ、アイマイサキ（スミヒキ）、ハス
下流や中筋川	オイカワ、オオキンブナ、カムルチー（ライギョ）、ギギ（ハゲギギ）、ギンブナ、ゲンゴロウブナ（ヒラブナ）、コイ、タモロコ、ハクレン、メダカ、モツゴ、ヤリタナゴ、ユゴイ
河口から汽水域	アオヤガラ、アカエイ（アカエ）、アカカマス、アカヤガラ、アカメ（ミノウオ）、アベハゼ、ウロハゼ（ユルハゼ）、カタクチイワシ（ホタレ、アギナシ）、カライワシ、クサフグ、クロサギ、クロダイ（チヌ）、クロフシフエダイ（モンツキ）、クロホシマンジュウダイ、コショウダイ、コチ、コトヒキ、コノシロ（メナガ）、ゴンズイ、サッパ（ハラカタ）、サビサゼ、サヨリ、シマフグ（キタマクラ）、シロウオ、シログチ（シラブ）、スギ、セスジボラ、ダイミョウサギ（アマギ）、タカノハダイ、ダツ、タネハゼ、チチブ（チチコ、ゴリ）、チワラスボ（アカウオ）、トサカギンボ、トビハゼ、ドロクイ（コノシロ）、ニベ、ハタタテダイ、ヒイラギ（ニロギ）、ヒナハゼ、ヒラスズキ、ヒラメ、ヘダイ（ヒョウダイ）、ミナミホタテウミヘビ、メナダ（スクチ）、ヨウジウオ、ロウニンアジ（マルエバ）

ないこと、④河川水温の上がる春から初夏にかけて、アユやゴリ類の稚魚や稚エビ、稚カニの遡上が盛んで餌が豊富なこと、が挙げられる。

（3）自然環境の分節と連関

四万十川流域の自然環境を、それぞれの要素から上・中・下流域と区分して見た。上流域は秩父帯の崩落地形が占め、中起伏及び小起伏山地から成る。四国山地の主峯を成すため山頂近くにはブナ林が分布し、一帯の河川は冷水域で、アマゴを代表種とする魚類相が特徴である。一方、中流域は四万十帯が占め、地盤運動により形成された穿入蛇行と谷底平野から成る。スギ・ヒノキ植林の割合が高いが、一部にシイ・カシ萌芽林も見られる。中流の特徴である穿入蛇行が続き、その瀬や淵の環境に適合するオイカワやアユが生息する。下流域は小起伏山地に細長く形成された谷底平野と広大な汽水域から成り、人工林よりもシイ・カシ萌芽林が多い。汽水域には海藻や海草類が生育し稚魚の生息場所となるとともに、海水魚の遡上も支えている。

フィジオトープにおいて上・中・下流域の分節が明瞭なため、バイオトープも対応するように3つに区分される。その一方で、四万十川自体には流域を横断する生態学上の特質がある。流域が分節されつつも相互に連関を有する自然環境の特質をこのように理解した上で、次に農林業をそれぞれフィジオトープと関連付けながら見ていこう。

3. 農業とフィジオトープ

四万十川流域の農林業は流域各市町の市史または町史に詳しくまとめられているが、これを積極的に四万十川と結びつけて、特にフィジオトープとの関連を重視しつつ、上・中・下流域の区分ごと、そして流域全体としての特徴を捉え直していこう。

（1）農業の特徴

四万十川流域の耕地は水田が卓越しており、経営耕地面積の中で水田が占める割合は84.4%である¹⁾。しかし旧市町村単位で見た場合、窪川地域93.5%、大野見地域91.1%、中村地域87.2%と水田面積率が高い地域があるものの、東津野地域や十和地域、梶原町などではそれぞれ45.0%、57.0%、63.3%を占めるに過ぎない。こういった中流部や上流部の地域では水田として利用できる平坦な場所は限られているため、斜面地を利用した畑や樹園地が発達している。たとえば東津野地域では樹園地が35.3%、十和地域では24.8%を占める。

山林では林業が行われてきたが、これについては第3章で詳しく述べることとする。

上流域／斜面地型農業 土佐藩は住民に林野監視の諸役を負わせる一方、林野の農業的利用として火入れを伴う焼畑については比較的寛大であった。梶原町や津野町といった上流域では少ない水田を補うため、広大な林野が焼畑に利用された。

焼畑では麦や黍、豆、粟、蕎麦といった当時の主食を生産した。地力が衰えてくると、耕作を止めて樹木の生い茂るままにして地力の回復を待った。焼畑にトウモロコシが導入されたのは近世末のことで、土壤に合うということで盛んに栽培された。また明治20年代からは商品作物としてミツマタも栽培し、その後の焼畑耕作を維持するものにもなった。『梶原町史』²⁾には、トウモロコシについては「本村に最適の作物」とあり、ミツマタは「本村屈指の一大物産となるに至れり。」とある。焼畑農業の栽

培品目は近世においてはヒエ中心からトウモロコシ中心へ変化し、明治末期にはミツマタを加え、自給的性格から商業的生産の性格を強めた。焼畑農業は昭和初期をその最盛期とし、以後年々減少したが、特に梶原町は戦前戦後を通じて我が国最大の焼畑面積を有しており、梶原の焼畑面積は最盛期で3,966町を示し、高岡郡別府町の3,850町がこれに続く。他の町村では2,000町を下回る。昭和25(1950)年の農業センサスによれば、焼畑農家率が70%以上を数え、まさに焼畑卓抜地域であった。

ところが、昭和10年代以降、林業の推奨や食料事情の変化により焼畑は減少していった。特に昭和20～35年には政府のミツマタ栽培保護の打ち切りやそのミツマタを原料とした百円紙幣の廃止なども影響して減少が集中した。現在梶原で焼畑を見出すことはできないが、その後に植えられた植林地の広さがかつての焼畑の存在を示している。

この時期、焼畑の減少に並行するように、上流域では水田が増加した。

上流域では、元々、秩父帯の地すべりによってつくり出された水を貯えやすい緩傾斜地に棚田を築き、貴重な米を得ていた(図2-2)。戦後になり農地法が制定され農地改革が進み、経済成長や食料事情の変化の中で、圃場整備、農道の開設、機械化による省力化など近代化のための農業生産基盤づくりが進められた結果、谷底平野一帯に棚田が生み出され

た。現在、津野町・梶原町の棚田で生産される米は「四万十源流の里 棚田米」として特産品になっている。

中流域／台地型農業 高南台地の内、中土佐町大野見地域の農地は四万十川に築いた堰とそこからの水路により中世には開墾が進んだと伝えられる³⁾。一方、四万十町窪川地域は、その中央を流れる四万十川本流の川幅が広く堰を造ることが困難だったため、広い平地部を持っていたにも関わらず開拓が遅れ、江戸に入ってから開墾が進んだと伝わる⁴⁾。高南台地の中心に位置する四万十町大井野は、天正年間の『長宗我部地検帳』(1587～1590年)の記録では石高はわずかに21石だったが、その後、承応年間に開墾され、堰と水路による灌漑が行われた。その結果、元禄年間の『高岡郡本田新田地払帳』(1699～1701年)には石高375石とあり、急速に開発が進んだことが分かる。

上流域同様、高南台地でも第二次世界大戦後に食糧増産などのために農地整備が進み、また引揚者等が入植して開墾を行うなどした。昭和40年代になると政府買上米に余剰米が出始め、減反政策の対象となったが、その結果、高南台地では転作作物として次第にショウガの作付けを行い始めた(図2-3)。

高南台地でのショウガ栽培は昭和41(1966)年に初めて4戸の農家が販売用として取り組んだのが始まりで、その後、土佐市などからショウガの入作が



図2-2 上流域の棚田



図2-3 高南台地の水田とショウガ畑

あり、その面積は年々増えた。地元農家も、霧の発生しやすい高南台地の自然条件が、霜に弱いショウガ栽培に向いていることに気づき、次第に生産者も増えた。ショウガ畑の面積は昭和 60（1985）年には 261ha に達し、高知県内におけるショウガ作付面積は昭和 55（1980）年以降一位を維持している。

中流域／河岸段丘型農業 高南台地以西の中流域は四万十帯と穿入蛇行のため耕地は極端に少ない。常畑として利用できたのは河川沿いに形成された 1 段ほどの河岸段丘や蛇行州の内部、環状蛇行跡の旧河床部に限られ、その上部の斜面地で焼畑を行ってきた。また河川沿いであるため氾濫も多く、水に浸かりやすい氾濫原などは桑畑として利用してきた。日本の養蚕業は幕末から昭和初期にかけて全盛期を迎え、海外にも良質の生糸を大量に輸出した。桑は河川の沿いの砂礫地といったやせた土地でも生育するため、四万十川中流沿いでは積極的に植えられた。

その後、第一次大戦後の不景気や昭和初期の大恐慌、第二次世界大戦による桑畑の作付け変更などにより桑畑は昭和 10（1935）年頃から次第に減少していく。そうした変化に合わせるように、戦後には灌漑設備や河川改修が行われたことで、河岸段丘上の水田化が進んだ。また中流における河川流通の衰退によりかつての中継拠点なども農業への依存度が高

まり、積極的に水田化が進められた。筏師の拠点であった小野集落では、昭和 15（1940）年頃から灌漑事業により水田化が進み、船頭が航行の安全を祈った流域最大の中州である三島では、昭和 30（1955）年に灌漑施設が整備され、現在は水稻とナバナの二毛作が行われている（図 2-4）。

下流域／平野型農業 四万十川下流の本流沿いには平地は少なく、中村平野の主軸をなすのは支流中筋川沿いの一帯である。前節の記述の通り中筋川は上流と下流とで高低差がなく、川底が海面よりも低い箇所もあって、四万十川の洪水時に逆流して氾濫が起りやすい土地であった。そのため中筋川一帯ではイグサの栽培が盛んに行われ、特に有岡は幡多地方の産地として知られ、有岡表と呼ばれた。また明治から水に強いコリヤナギの栽培が導入され、このヤナギを編んだ柳行李の生産が行われて特産物となった。低湿地の環境による耕作の不利、また洪水被害などの半面、洪水がもたらす肥沃な土砂や高温多湿の自然環境を活かした農業が行われた。

四万十川の河口付近は河川の堆積作用により砂質土壌が分布し、水田には不向きだったため畑作が主だったが、竹島地区では大正 2（1913）年から砂地に向いた梨の栽培がおこなわれはじめた⁵⁾。現在は竹島梨と呼ばれ出荷される。また河口近くではラッ



図2-4 中流域小野地区の水田



図2-5 下田のラッキョウ畑

キョウの栽培も盛んである（図2-5）。ラッキョウは砂質の水はけのよい土壌で栽培すると色が白く繊維が細くなり、高品質のものとなる。四万十川と竹島川に挟まれた砂州状の低地部などで生産されている。

（2）流域の自然環境と農業との関係

四万十川流域での農業として、上流域で見られる石積み棚田での水田耕作や高南台地での仁井田米生産、ショウガ栽培などが取り上げられることが多いが、それらは必ずしも四万十川流域の自然環境との関係からして語られてこなかった。しかし、流域のフィジオトープの特徴に沿った切り口で見直してみると、石積み棚田は秩父帯の崩れやすい地形を活かしたもので、高南台地での農業は四万十帯の隆起により生まれた谷底平野の環境があったからこそ成り立つものだとわかる。

また、流域全体を通して見ると、現在上流から下流にかけて見られる水田景観は戦後の農地改革で新たに形作られたもので、この時期に流域は一連のものとしてドラスティックに変化したといえる。その変化は、水運から陸運の時代への変化とも関係している。水運に関する変化の様相は第3章でくわしく見ることとするが、その変化は、流域の農業にも影響を及ぼしていることを指摘しておきたい。

4．内水面漁業と河川特性

四万十川はその魚種の多さと漁業資源の豊富さにより、川で生計を立てる川漁師が存在する数少ない河川である。それゆえに、伝統漁法が根強く伝承されている。生態学上も、全国でも稀にみる大型のアユの生育がみられ、また河口では藻の生産も特徴的である。本節ではこうした内水面漁業の特徴を河川特性と絡めて流域との関連について考えていこう。

（1）四万十川における内水面漁業の特徴

四万十川の内水面漁業は河口から水源に至るまで全川的に行われている。主な漁業対象として高知県内水面漁業調整規則により漁業権と漁期が決められているのは、スジアオノリ、ヒトエグサ、アユ、ウナギ、コイ、アマゴ、モクズガニの7種である。こうした資源の乱獲を防ぐために、四万十川本流には四万十川漁業協同組合連合会という会があり、四万十川で操業する4つの組合（東部・西部・中央・下流漁協）から構成され、各地域での漁業権の設定を行っている（図2-6）。組合員総数は平成10年で



図2-6 四万十川流域での漁業権の管理団体

2,446人である。

伝統漁法の継承 四万十川では河口から約80km上流の中流域まで海水魚が遡上する。これは四万十川の河川勾配が緩いことや河川と海の水温差が小さいことのほか、人工護岸や堰など生物の往来を妨げるような構造物が少なく、生物の生息環境が良好に確保されていることが理由にあると考えられる。汽水域は満潮時で河口から約9.5km上流にまで及び、コアマモやウミヒルモが多く群生するアマモ場が見られる。アマモ場は河口域の稚魚の保育場的役割を果たしており、確認魚数185種と、四万十川を全国一の河川魚類相を誇る川へと導いている。

良好な河川環境が維持されてきたことから、四万十川では生息する魚種や河道条件の違いに応じた様々な漁法が継続して行われている。河口域では川幅の広さと水深を活かした投げ網漁、ガラ引き漁、エビ玉漁、コロバシ漁、柴漬け漁、石ぐる漁などが行われ、中流域では瀬や淵を利用した火振り漁やハエナワ漁、上流部では溪流でのセバリ漁やウナギ箱漁などがある。

現在は禁止漁法であるヤナ漁は、落差のある瀬が連続する上流域から中流域にかけて見られた特徴的漁法である。この漁法が四万十川では源流域から四万十市の佐田沈下橋下流の小野の瀬に至る流路で行われていた。河口から約13kmの地点まで中流域的な生業の特徴が迫っているといえる。



図2-7 四万十町大正での火振り漁

また汽水域では明治の中頃からスジアオノリやヒトエグサ（アオサ）を採取して加工販売するようになった。この2種の藻類は、今日、四万十川河口部における特産品となっており、流域あげての清流保全、水産資源の保全が必要とされている。

近年、四万十川では河川環境の変化により漁獲量や収穫量の減少が見られるが、そうした中でも、流域では漁の対象とする魚種や漁法の在り方を柔軟に変化させながら、河川相に応じた多様な漁法、また川漁を組みこんだ暮らしは継承されている。

河川環境とアユの生息環境 四万十川流域では、上流寄りで獲れる大型のアユを特に津野山アユと呼ぶ。鼻が曲がり、頭から背びれにかけての背縁がカラフトマスのように盛り上がっているのが特徴である。平均全長は25～26cmで体重200gに達し、中には32cm・400gの大物も記録されている。2～3月の遡上初期にのぼり始めた大きい稚アユは、数日の間に四万十川上流までのぼりつめることができる。そのため成育に好条件の地点に縄張りを持つことができ、成長が進み、大型のアユが育ったと考えられている。津賀ダムの建設により棒原川上流では従来のような大型のアユは見られなくなっているが、放流アユでも20cm以上で100gを超すものが採捕され、津野山アユの面影を残している。

河川環境が変化してかつてに比べてアユの漁獲高は減少しているものの、高知県下の主要河川と比べ、



図2-8 火振り漁で立網にかかったアユ

表2-3 四万十川で見られる魚種ごとの漁法と漁期

魚種	区分	漁法	漁具	漁期(月)	備考
アマゴ	釣	アメゴ釣り	釣竿	6-7	上流域
		トバシ漁	毛針	4-7	上流域
	その他	釜	釜	10-11	上流域
		カナツキ	カナツキ	6-7	上流域
ウグイ(イダ)	釣	イダの釣り	釣竿	3中-4中	
	網	タチイダ	投網	3中-4中	
		イタチ漁	網・イタチの皮	12中-2中	上流域
	その他	イダブシ	イダブシ	10-11	
カワムツ	釣	ハヤツリ	釣竿	5中-8	
オイカワ	その他	ワリコ	ワリコ	5中-8	
		ハヤジゴク	ハヤジゴク	5中-8	
アユ	釣	アユの釣り	釣竿	6-8	
		友掛け	釣竿	5中-10中	
		ゴンブリ	釣竿	8-10中・11中-12	
		シャクリ	釣竿	8-10中	
	網	投網	投網	6中-10中・11中-12	
		マワシウチ	投網	6中-10中・11中-12	下流域
		投げ網	投げ網	7中-10中・11中-12	
		注連縄(瀬張り)	注連縄・建網・投げ網	9-10中・11中-12	
		地曳網	地曳網	9中-10中	下流域
		張り網	張り網・水中眼鏡・カナツキ	7中-10中・11中-12	
		にぎりすくい	網	8	下流域
		火振り漁	建網・イサリ等(火光)	7-10中・11中-1	
	その他	アイニギリ		8月9日	禁止
		ヤナ	ヤナ	8-10中・11中-12	禁止
		鵜飼	鵜縄など	6-10中・11中-12	禁止
コイ	網	寒鯉漁	カナツキ・網	10-3	
	その他	カブセツキ	カナツキ	6-9	
ウナギ	釣	ハエナワ	ハエナワ	4-11	
		スズクリ	スズクリ	4中-5・8	
	網	ヒゴ釣り	ヒゴ釣り	7中	
		柴漬け	スクイタマ・柴	3中-11	下流・汽水域
	その他	石グロ	網・石	4-12	下流・汽水域
ゴリ (ヌマチチブ)	網	コロバシ	コロバシ	5-10	
	その他	ウバサミ	ウバサミ	6-9	
		ガラビキ	ガラビキ・四つ手網	3-4	下流域
		ブツタイ	ブツタイ・笹束	5-8	
エビ	網	のぼり落とし	ゴリウエ・立て簀	3-5	
		エビタマ	エビタマ	6-9	
	その他	水中銃	水中銃	7中-8	
		エビツツ	エビツツ	6-9中	
アオノリ	その他	エビスタイ	ソウケ	4-6	
モクスガニ (ツガニ)	その他	アオノリ漁	アオノリカキ	10中-2・5中	下流・汽水域
	釣	カニ釣り	カニ釣り	9	増水時
クロダイ	その他	カニジゴク	カニジゴク	9中-10	
クロダイ (チヌ)	釣	餌釣	釣竿	9-2	
	その他	チヌカゴ	チヌカゴ	5-9	汽水域



図2-9 ウバサミ



図2-10 カニカゴ

四万十川は、海まで出ず河口域で成長する稚魚が存在し、その結果として母川である四万十川への回帰率が高くなるという。勾配が緩く穏やかな流れが広大な汽水域をつくりだし、それがアユの生息数にも影響を与え、中流や上流での漁業資源や伝統漁法の継承にも関係している。

（２）汽水域の特徴を活かした藻の生産

四万十川は流域面積に対して河口の平野部が非常に小さい。その河口域も平坦な地形のため広大な汽水域となり、満潮時には最大で9.5kmまで海水があがることもある。この特徴を活かして河口近くでは藻類であるスジアオノリとヒトエグサを対象とした生業が営まれている。

天然のスジアオノリ スジアオノリは汽水域で

よく繁殖する水生植物で、アオノリとも呼ばれる。四万十川の河口水域には広い範囲に生育し、川床の小石の表面に着生する。秋に気温が下がり始める10月頃から生育をはじめ、翌年の春にかけて川床を緑一色に染め上げる。11月から1月にかけて最も成長し、糸状体は50～60cmに伸びる。この時期に成長したスジアオノリを「冬のり」と呼び、干潮時の数時間の間にカギとよばれる道具で川底のノリを引っかけて掻き取る（巻末図版36、図2-11）。採取されたノリは河原に張られた縄に架けられ、混じった小石などを手作業で丁寧に取り除き、寒風で半日乾燥してから取り入れられる（巻末図版37、図2-12）。3月から4月頃にもう一度スジアオノリの成長する時期があり、「春のり」と呼ばれ、「冬のり」よりも成長が早い。現在の生産量は年間約20tで、



図2-11 スジアオノリ漁



図2-12 天日干しされるスジアオノリ



図2-13 ヒトエグサの採取



図2-14 ヒトエグサの出荷

国内生産の70%のシェアを誇る。

『中村市史 続編』⁶⁾によると天然のスジアオノリが商品として本格的に出荷されるようになったのは明治期以降で、次第に販路を関西圏へと広げたという。海を介して四万十川河口と関西が結ばれていたことがスジアオノリの商品化にもつながったと考えられる。

ヒトエグサ養殖 ヒトエグサはアオサとも呼ばれ、こちらは養殖されて出荷される。養殖場は下田港で本流に合流する支流竹島川の河口部に設けられている(巻頭図版N、巻末図版31～35)。川の中に張った網の上で9月下旬から栽培され、潮の干満によって水中と大気中とを行き来しながら生育する。12月下旬から適宜摘み取りが行われ、冬場が漁期である(図2-13・2-14)。

ヒトエグサ養殖は四万十川を介した水運の衰退に伴い戦後から行われ始めたもので、特に昭和39(1964)年に下田の堤防沿いに大規模な養殖場が整備されたことで収穫量を増やし、下田の主力産業へと成長した。

(3) 水系の特質と内水面漁業の関係

四万十川の豊かな魚類相の背景にあるのは、四万十川の緩やかでおおらかな流れ、それにより形成される広い汽水域、また上流域までこの緩勾配だったことからダムが築かれることなく保たれた河川環境にあるといえる。この漁業資源の豊富さが多様な漁法を生み出し、現在まで持続させている。

また四万十川河口ではスジアオノリの採取やヒトエグサの養殖が活発だが、それらが特産物となり得たのは、広い汽水域の存在と河口の人工構造物の少なさといった四万十川の特徴のほか、上・中流域の森林から運ばれてくる豊富な有機物との関係があるだろう。

従って、内水面漁業においては、四万十川を上流から下流まで一連のものとして常に意識化することが重要である。

5. 流通往来・文化とフィジोटープ

四万十川流域では人の生活もフィジोटープに規定されて上・中・下流域のまとまりごとに独立性を有する。しかし、流域のまとまりごとに流通・往来のあり方、そして文化のあり方を見てみると、地域間に共通した性格があるように見えてくる。本節では流通・往来と文化のあり方を組み合わせて捉え、上・中・下流域相互の連関について見ていこう。

(1) 流通・往来

A 上・中・下流域の流通と往来

上流域 上流域一帯は伊予と接し、その間は秩父帯の起伏量の少ない山地で区切られている。峠越えが容易であるため、延喜13(913)年に津野経高が梶原へ入国した際も伊予からの峠越えのルートが利用されたとされる。

津野領主開拓当初はこのなだらかな山地を利用した尾根道が主流だったが、時代の推移に従って領国経営上の必要などから上流域を東西海側へと抜ける梶原街道が整備された。安土桃山時代には、長宗我部軍が現城川町三滝城外諸城攻めに通り、江戸時代には津野山郷民が藩の圧政に耐えかね一揆を構えるため、庄屋や指導者が処刑覚悟で、協議のため往來した道でもある。明治維新には、後述する勤王の志士たちが、国の政治や社会の革新を目指して、この道を通り脱藩して国事に奔走した。

梶原街道は、須崎と大洲とを結ぶ江戸期の街道で、大洲街道ともいう。高知城下から通じる土佐西街道の中村街道から分かれ、須崎から姫野々ー白石ー布施ヶ坂(以上新莊川流域)ー船戸ー北川ー梶原(以上四万十川流域)ー五十崎・大洲に至る。梶原まで、須崎から13里半、高知から22里半の道程である。船戸は四万十川の上流で交通の便がよく送番所があった。船戸から3里。さらに3里半で梶原の口番所に達する。梶原から西へ大越峠を越えると広野に出るが、ここから四万十川に沿って北上すると宮

野々の関に至る。宮野々から西行すると伊予との国境、標高 830m の九十九曲峠に達する。峠を越して伊予路に入り、五十崎や大洲に至る。梶原と大洲、梶原と五十崎を結ぶ街道は人々の往来だけでなく、梶原の楮・ミツマタを五十崎に運び、大洲・長浜から味噌・醤油・塩などの生活物資を梶原へ運送する道でもあった。現在の国道 197 号は須崎～梶原間はほぼ旧街道を通っており、梶原からは九十九曲峠南部の西ノ川を通過して愛媛へ抜けている。

中流域 中流域では、四万十川が山間部の峠を避けて大きく蛇行して流れるため平地に乏しく、四万十川の河川水運が主要な交通手段であった。特に、明治初頭には、木材や木炭、仙花紙などの需要の増加と共に、河川舟運が活況を呈していたが、明治 30 年頃に、四万十川沿いに窪川から宇和島を結ぶ県道窪川宇和島線（現、国道 381 号線）が着工、昭和元年に全線開通することで、陸路交通が発展することとなる⁷⁾。明治以降の道路改修に呼応して、荷馬車やトラックが登場、森林資源搬出のため山林軌道の敷設や林道整備が順次進められ、大正、昭和初期と河川舟運が徐々に衰退した。昭和 20 年代半ばから沈下橋が次々と架けられ、河川水運による木材運搬は姿を消した。

中流域一帯は、東西に伸びる地層の影響のため、四万十川も東から西へ大きく蛇行する。急峻な山間地のため、陸路も四万十川沿いのルートを取らざるを得ず、河川水運と陸路が東西に平行する水陸交通網が形成された。

下流域 下流域では、広美川、目黒川、黒尊川が四万十川に合流して川幅を広げながら山間部を抜け、中村平野へと流れ出る。幡多郡の中心地であった中村は、中世に一条氏の城下町として栄え、高知城下から須崎－久礼－窪川－中村を結ぶ中村街道（現、国道 56 号線）が横断することとなった。

四万十川は、中村平野を抜けると、後川、中筋川と合流して河口の下田で土佐湾に流れ出る。河口の港町下田では、近世初頭、土佐藩家老の野中兼山に

よって港湾整備が行われ、四万十川流域の積み出し港として、土佐湾沖の浦々を経由しながら、関西方面へ四万十川上流域の山林資源を輸出していた。

下流域一帯は、急峻な山間部を縫う様に流れる四万十川が、平野部や海岸といった土地に大きく開ける。その結果、南北に流れる四万十川の河川水運と東西方向の陸海運が結びついた各種交通の結節点として、四万十川流域の流通往來の要衝地となった。

B 流通・往來全体の特徴

四万十川流域では、上・中・下流域それぞれを横断するように流通や往來が発達し、各まとまりの独立性が高められている。一方で、そのどれもが東西方向に並列したもので、横方向との結びつきの強い四万十川流域の特徴を生んでいる。

(2) 文化

A 上流の津野山文化

四万十川の源流域である津野山地域（梶原町・津野町）は、延喜 13（913）年、京より津野経高が入国し津野庄を築いて以来、慶長 5（1600）年、津野城主親忠死没に至るまでの約 700 年間津野氏の所領となり、神楽を始めとする伝統文化や、厳しい山里の暮らしを支える農耕文化や生活文化など、さまざまな地域の文化が生まれた。

この地域には、国の重要無形民俗文化財の指定を受けている津野山神楽はじめ、花取踊り、回り舞台での農村歌舞伎などの民俗芸能が伝承されている。

津野山神楽⁸⁾ 津野山神楽は、梶原町および隣接する東津野村を合わせて津野山郷と称していたことからこの呼称がある。この神楽がいつどのようにして演じられようになったかを知る資料はまだ発見されておらず、寛永 12（1635）年の銘のある古面が年代を知るうえで最古のものである。この地方の社殿には大きな四本の丸柱が設けられていて、神楽はその内側を舞台として舞われる。宮入、禊祓詞、手草、天の岩戸、悪魔祓、大蛭、花米、二天、山深し、長刀舞、弓舞、鬼神退治、猿田彦、折敷、妙見、豊饒

舞、鯛釣り、四天の計 18 通りの演目があり、正式に舞い納めるには約 8 時間を要する。テンポのよいお囃子のリズムに乗った軽快な舞を特徴とする。

津野山神楽は、現在では梶原町の「津野山神楽」と旧東津野村の「津野山古式神楽」という二つの神楽に分かれているが、藩政時代には、現在の旧東津野村と梶原町とで構成される旧津野山郷で行われていた 1 つの神楽であった。津野山神楽は代々神職によって継承されていたが、昭和 20 (1945) 年の終戦後、正統な継承者は 33 代・掛橋富松翁唯一人となるに至った。そこで神楽復興の気運が起こり、昭和 23 (1948) 年 9 月、それまで同じ神楽組をなしていた 2 つの町村で保存会が分かれ、梶原町津野山神楽保存会、東津野村津野山神楽保存会として伝承していくこととなった。2 つの保存会にわかれた津野山神楽は、現在その間に多少の差異が生じてきている。

神楽はかつて村人の娯楽であったが、いまや高知県の観光資源にもなっている。毎年 6 月初めに梶原町で行われる四国神楽大会は、土佐牛丸かじり大会と同時に実施され、多くの見物客が訪れる。

高野の回り舞台 明治 6 (1973) 年に建築された回り舞台で、津野町高野地区に残る⁹⁾。昭和 52 (1977) 年に国の重要有形民俗文化財の指定を受けた。現在は、高野地区住民の手により 4 年に 1 回、農村歌舞伎が上演されている。



図2-15 盆の迎え火 (四万十町下津井)

B 上・中流で見られる伊予の影響

上・中流域で祭りといえば、一般的には、集落を単位として執り行われる盆祭りと秋祭りのことをさす。前者は祖霊迎えの祭りであり、後者は神迎えの祭りである。盆祭りの中心となる施餓鬼供養は、戸主を中心にした集落行事であるのに対し、秋祭りは老若男女、多数の氏子たちが様々なかたちで参加することにより進行される。

川と結びついた盆祭り 幡多郡北部および高岡郡北部、すなわち四万十川中、上流部における盆の施餓鬼供養は、高知県下の盆習俗の中にあって特記すべきものである¹⁰⁾。その特質とは、「南無阿弥陀仏」曲節を付けつつ繰り返し唱和する「大念仏」である。

施餓鬼は現在、新暦 8 月初旬になされるところが多くなったが、近年までは旧暦 7 月 1 日から 7 日ごろにかけて行われていた。各集落によって日数の差はあるが、茶堂や集会所、もしくは川原に施餓鬼棚を設け、新仏、無縁仏、各家々の霊、集落内の主な神仏に対して一定数の大念仏を奉唱するのが、この地方の施餓鬼の基本となっている。

施餓鬼が終わると本盆のお祭りである。各家では座敷に盆棚 (精霊棚ともいう) をつくり、各種のお供物をする。迎え火・送り火は、長いタケやササの先に松明を灯し、家の門先や河原、畔などに立てて行う。また近くの川辺で松明を焚いて「火とぼし」



図2-16 仁井田神社秋季大祭での神楽 (四万十町下津井)

という水まつりを集落ごとに行い、送り迎えをする地域もある。

このようなお盆の行事は、祖霊は墓よりもむしろ川から迎え、川から送るという認識が強く現れた結果であり、四万十川の上・中流部の集落で現在でも行われている。

伊予文化の影響を受けた秋祭り 秋祭りでは様々な民俗芸能が奉納される。各社では神楽や念仏系の花取踊りのほか、牛鬼や鹿踊りといった伊予文化の影響を受けたものも見られる。

牛鬼は宇和島を中心とする南予から北幡に伝わったもので、神社の幟を身にまとい、眉間に白幣を垂らした牛鬼が、厄払いをしながら集落の一軒一軒を回る。毎年の大祭に行列を組んで、神体を載せた御輿を御旅所まで運び、野外で祀る。その際、牛鬼も一緒に練り歩く。御輿の前後をいろいろな役付きのものが並んで、お旅所までの往復を守る隊列で歩く。神社ごとに道具も役付人数もちがい、行列の順序も多少ちがうが、行列の中央どこかを御輿が行くことは共通している。四万十町では、曾我神社の秋の大祭や熊野神社大祭、仁井田神社大祭、四万十市半家では半家天満宮大祭などで見られる。

鹿踊りは旧宇和島藩・伊達文化の流れをくむもので、締太鼓の響きと共に鹿に扮した5人の子供たちが、1頭の雌鹿を4頭の雄鹿が奪い合う様を舞う郷

土芸能である。四万十市西土佐では毎年4月と11月の金刀比羅宮大祭で、四万十町十和では11月1日の地吉八幡宮大祭でそれぞれ奉納される。

C 下流の一条文化

幡多地域に属する四万十市中村では、土佐一条氏が15世紀から16世紀にかけて約100年にわたり公家文化を展開させた。

四万十川の下流に位置する中村は、中世には関白一条家の荘園であった。前関白一条教房が応仁の乱を避けてこの地に移り住み御所を構えて以来、中村を荘園から文化都市へ転換させていき、二代房家以降もこれを引き継ぎ発展させていった。その後中村では京の都を模して碁盤目状に街路を引き、右京、左京にちなんだ右山、左岡をはじめ、東山、鴨川、祇園社、愛宕山など京の地名を冠した都市づくりが行われた。また延暦寺になぞらえて石見寺を、京都の石清水八幡宮を勧請して不破八幡宮を建立し、幡多地方の総鎮守とするなどした。

また中村では、不破八幡宮での「御輿の洗い」や「神様の結婚式」、間崎地区の「大文字山の送り火」などさまざまな伝統文化が今に伝えられている。現在ではその文化は一条文化と呼ばれ、京風の文化として継承されている¹¹⁾。

不破八幡宮 不破八幡宮は、四万十川左岸、渡川大橋下流200mに位置する。一条教房が応仁の乱を



図2-17 西区三嶋神社の牛鬼（栲原町竹の藪）



図2-18 不破八幡宮の神輿洗い

避け荘園経営のため中村に開府のとき、幡多の総鎮守として又一条家守護神として山城国石清水八幡宮を勧請したものであり高知正八幡、広幡八幡ともいわれる。本殿は永禄元～2（1558～1559）年に建てられたもので、県内では大豊町の豊楽寺薬師堂、高知市の竹林寺本堂に次ぐ歴史を持つ建築物であり、室町末期の古建築を知る上で貴重な遺構である。昭和38（1963）年7月1日付で国の文化財保護委員会より重要文化財の指定を受けた。

大文字の送り火 四万十市間崎地区で行われる盆行事で、夏の終わりを告げる風物詩。毎年旧暦の7月16日、山の神を祭っている十代地山（地元では、大の字山と呼ぶ）の中腹の草木を大の字形に掘り、そこに地区の各戸から集めた松明を配して焚火を行う。この行事は、約500年前、応仁の乱を逃れて中村に下った一条教房の息子、房家が教房と祖父兼良の精霊を慰め、京都を懐かしんではじめたと伝えられている。現在は、間崎地区住民が運営し、間崎地区78戸が7組に分かれ、各組が1年交代で当番にあたる。

（3）流通・往来と文化との関わり

上・中・下流域という区分で四万十川流域の流通・往来と文化を概観すると、それぞれが個性を持っているばかりでなく、その区分に従って流通・往来のあり方と文化の様相との相互の関係が見えてくる。

上流域は東西に梶原街道が通り、下流へ下ることなく高知や大洲・宇和島と直接行き来をしてきた。その梶原街道が整う以前から峠を越えての流通・往来は盛んで、中世に京から上流域に入国した津野氏も峠越えのルートをとったと伝わる。津野氏は約700年にわたり上流域を統治し、その間に花開いた津野山文化が継承されている。

中流域では、東西に流れる四万十川に沿って水運や陸路の交通が開かれた。西は宇和島へと通じ、そこから伊予文化が一带に吹き込み、現在も牛鬼や鹿踊りとして祭りに見られる。また、東は土佐湾に接

する港に近く、高南台地周辺の林産物や米が峠を越えて搬出され、流域を越えて結びついていた。

下流域は中村街道で高知とつながり、また海運で四国の港湾や関西圏とダイレクトに結ばれた。応仁の乱から逃れた一条氏も海を介して中村へ下り、約100年間の統治であったにもかかわらず京風の文化を下流域に根付かせている。

流通・往来と文化は、上・中・下流域の地域的なまとまりごとに対の関係にあるといえる。それは、流域の文化が人々の行き来を介して入ってきたものであるためだが、そうなり得たのは四万十川独特の地形や地質の存在があったからに他ならない。

6. 流域一体としての関係性

文化的景観として見た四万十川流域の特質のひとつは、地形や地質といったフィジオトープに規定されて上・中・下流域とで分かれるまとまりにある。農業や漁業、また人々の往来や物流はこの3つの区域に分節されて行われてきた。

それと同時に、そこには水の流れて結ばれたひとつの流域としての関係も存在する。

四万十川の緩い勾配により河口に広い汽水域が生まれることでアユの稚魚の生息環境となり、結果的に海まで出ず成長して再度四万十川中・上流へと戻ってくる個体が多くなる。漁業資源の豊富さが、中流域での火振り漁といった流域一体の伝統漁法の継承へとつながっている。また汽水域の存在が河口でのスジアオノリやヒトエグサの生産を成り立たせているが、その背景には上・中流域の森林から運ばれてくる豊富な有機物の存在も欠かせない。

上流からの四万十川の流れる下流側に洪水を生むとともに肥沃な土壌も運び、高南台地や中村平野での農業基盤となっている。流れにより細かく砕かれた岩や石は川の運搬作用により押し流され、河口にはより細かくされた砂がたまり、それを利用して河口ではナシやラッキョウの栽培が行われている。

流域の一体性は川を介した物質循環面だけでなく、上・中・下流域のまとまりの中に類似の構造が見られることからいえる。つまり、流通や往来は東西方向に延びるものであること、そのルートを通じて文化が流入し継承されていること、津野山文化や一条文化は中世に京都から導入されたという特性を持っていること、といった共通項が存在し、この類似性が流域全体としてのまとまりを生んでいる。

つまり四万十川流域は、地域間での直接的な結びつきというよりも川を介した間接的な関係性により、ひとつの全体を成しているといえる。

注

- 1) 農林水産省統計部編『2005年農林業センサス』第1巻39、農林水産省統計部、2007年。
- 2) 梶原町史編纂委員会『梶原町史』梶原町、1968年。
- 3) 大野見村史編纂委員会『大野見村史』大野見村、1956年。
- 4) 窪川町史編集委員会編『窪川町史』窪川町、2005年。
- 5) 中村市史編纂委員会編『中村市史 続編』中村市、1984年。
- 6) 前掲注5『中村市史 続編』。
- 7) 十和村史編纂委員会『十和村史』十和村、1984年。
- 8) 前掲注2『梶原村史』。
- 9) 松崎茂「土佐の歌舞伎系廻り舞台：農村舞台考その78」『日本建築学会研究報告』59号、日本建築学会、1961年。
- 10) 前掲7『十和村史』。
- 11) 中村市史編纂室『中村市史』中村市、1969年。

参考文献

- 1) 大野見村史編纂委員会（1956）『大野見村史』大野見村
- 2) 東津野村史編纂委員会（1965）『東津野村史』東津野村
- 3) 梶原町史編纂委員会（1968）『梶原村史』梶原町
- 4) 中村市史編纂室（1969）『中村市史』中村市
- 5) 西土佐村史編纂委員会（1970）『西土佐村史』西土佐村
- 6) 建設省四国地方建設局中村工事事務所（1970）『渡川改修四十年史』
- 7) 山本大編（1982）『高知の研究6（方言・民俗編）』清文堂出版
- 8) 十和村史編纂委員会（1984）『十和村史』十和村
- 9) 角川日本地名大辞典編纂委員会（1986）『角川日本地名大辞典』39 高知県、角川書店
- 10) 伊藤猛夫編（1990）『四万十川くしぜん・いきもの>四国の河川（1）』高知市民図書館
- 11) 建設省四国地方建設局中村工事事務所（1991）『六十年のあゆみ』
- 12) 環境庁（1995）『自然環境情報図』
- 13) 建設省（1997）『河川水辺の国勢調査』
- 14) 高知県文化環境部環境保全課（1999）『土佐の自然』No.80
- 15) 高知県文化環境部文化環境政策課四万十川流域対策室（2000）『四万十川なんでも事典』
- 16) 梶原町文化財審議会編（2001）『ゆすはらの文化財』梶原町教育委員会
- 17) 国土交通省四国地方整備局中村工事事務所（2001）『渡川水系の流域及び河川の概要』
- 18) 国土開発調査会（2002）『河川便覧2002』
- 19) 澤良木庄一（2003）『四万十川の植物自然－四万十川植生観察副読本』川北印刷
- 20) 窪川町史編集委員会編（2005）『窪川町史』窪川町
- 21) 大正町史編集委員会編（2006）『大正町史』大正町